

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00870

研究課題名（和文）社会的関係形成をめざす韓国語カリキュラム開発のための基礎研究

研究課題名（英文）A Basic Study on the Development of Korean Language Curriculum for Building Social Relationships

研究代表者

李 安九（Lee, Ankoo）

岡山大学・教育推進機構・准教授

研究者番号：70549302

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の大学授業で実践できる、社会的関係形成をめざす統合型韓国語カリキュラムを開発するための基礎研究である。

本研究では、学習者の社会・文化的特性および母語の言語資源など、学習者変因を反映した、日本の大学における韓国語教育課程の編成について理論的な面での研究を行い、実践的な面での方法を探った。社会的関係形成のための活動とコミュニケーションツールとしての言語項目を結びつけた統合的な学習モデルの提案を目指して、日本の大学授業でよく使われる入門用教科書の語彙や文法事項、そしてコミュニケーション活動の内容を、既存の韓国語能力の到達度評価基準と比較しつつ検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

韓国語教育に関する研究は、主に韓国における韓国語教育を想定し、学習者の母語や文化・社会的背景、学習環境などはあまり考慮されていないが、本研究では「日本」の「大学」で、「日本語を母語とする」といった学習者の特性に注意を払い、語学学習の領域に止まらず、他者とつながる社会的関係形成のための活動とコミュニケーションツールとしての言語項目を結びつけた統合的な学習モデルの提案を目指そうとした。そして本研究では、国立大学の教養韓国語授業のシラバスを全数調査したが、これは日本の韓国語教育の現状を把握する上で有意義な参考資料となると期待される。

研究成果の概要（英文）：This research is a basic study to develop an integrated Korean language curriculum for universities in Japan, aimed at building social relationships.

In this study, we conducted theoretical and practical research on the organization of Korean language curriculum of Japanese universities, reflecting the social and cultural characteristics of learners and language resources of their mother tongue. In order to propose an integrated learning model that combines activities for social relationships and language items as communication tools, we examined the vocabulary, grammar items, and communication activities in introductory textbooks commonly used in Japanese university classes, comparing them with existing standards for assessing achievement in Korean language proficiency.

研究分野：韓国語学

キーワード：日本の大学における韓国語教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の大学における韓国語教育は年々拡大してきたが、その現況については十分に把握されておらず、日本の大学で行われる韓国語授業の学習到達度評価基準に関しても、あまり議論されたことがなかった。

(2) 既存の韓国語能力到達度評価基準は、学習者の母語や文化・社会的背景、学習環境などがあまり考慮されず、言語によるコミュニケーションや文化の学習を通して得られる自己成長や他者の発見、そして社会や世界とのつながりといった点に関する意識はそれほど表れていなかった。また、社会的活動や実践を中心とする場合は、具体的な学習内容となる言語項目(語彙、文法など)とどう結びつけるかについて十分な研究が行われていなかった。

2. 研究の目的

(1) 韓国語コミュニケーション能力の育成のみならず、それを通して他者とつながることを図る統合型韓国語学習カリキュラムとして、日本の大学授業で実践できるモデルを開発するための理論的・実践的基礎の構築を目指そうとした。

(2) 日本の大学で行われている韓国語教育の現状を調査した上で、日本の大学授業における韓国語学習の到達度評価基準について、学習者の母語や文化・社会的背景などを考慮し、既存の韓国語能力到達度評価基準と比較しつつ検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 韓国語によるコミュニケーションを通して他者や世界へつながる社会的活動を実現させる総合型カリキュラム開発のための理論面・実践面での基礎研究を実施した。

(2) 日本の大学で行われている韓国語教育の現状を把握するため、インターネットで公開されている韓国語授業のシラバスを調査し、先行研究のデータと比較・考察した。

(3) 日本の大学授業で使用できる韓国語教材を開発するための基礎研究として、大学授業でよく使われる入門用教科書を調査し、コミュニケーション活動に必要な韓国語の語彙や文法事項について検討した。学習者の母語や文化・社会的特徴、学習環境を考慮しつつ、既存の韓国語能力到達度評価基準で示された語彙や文法事項との比較を行った。

4. 研究成果

(1) 日本の大学授業で実践できる、社会的関係形成を目指す韓国語カリキュラム開発のための基礎作りとして、研究責任者(李安九)と研究協力者(南潤珍)が共同で、理論的な面を中心とした研究を行った。その成果を台湾で開催された国際学会で発表し、論文としてまとめたものが李安九・南潤珍(2019)「社会的関係形成を目指す韓国語教材開発に関する予備的考察(原題:韓国語)」である。

李安九・南潤珍(2019)では、「日本」、「大学」という脈絡における韓国語教育の方向性や必要事項を、①韓国語教育をめぐる日本の大学の状況、②日本語を母語とする学習者の特性を反映した韓国語教育課程の要件、③実践的な教材開発の要件にわけて考察を行った。その結果、
()韓国語学習を通して他者を認識し、自分を客観的に省察することができるきっかけを提供すること、
()知識や機能の習得はもちろん、批判的な思考力に基づいた実践のきっかけを提供すること、
()日本語母語話者の言語や社会・文化的特性を反映すること、
()授業時間や学生の属性(専門課程か教養課程か)など大学の学習条件を反映することを提案した。

日本の大学で実践できる統合型韓国語カリキュラム開発のための実践面での基礎作りとしては、南潤珍(2019)「学習者変因を反映した日本の大学における韓国語教育課程の開発 学習者の社会・文化的特性および母語の言語資源を中心に」、及び南潤珍(2021)「韓国語の社会文化的特性を反映した教材における言語項目の選定について」の学会発表を行った。それをまとめた南潤珍(2021)「韓国語の社会文化的特性に基づいたコミュニケーション機能別の言語項目表の試み - 日本語話者のための大学教材開発の予備的考察 - 」は、日本の大学で使う韓国語教材の開発のため、学習者の母語や社会・文化的特性、そして韓国語の社会文化的特性を反映したコミュニケーション機能と韓国語の言語項目の対応表の作成を試みたものである。

(2) 日本の大学における韓国語教育の現状を把握するため、国立大学(大学院大学を除く)の教養課程を対象として2020年度韓国語授業のシラバスを全数調査し、その成果を李安九(2020)「日本の国立大学における初修外国語としての韓国語教育の現状 - ウェブ公開のシラバスからの考察 - 」の論文で発表した。

李安九(2020)では、①教養科目としての韓国語授業の開設状況、②科目名、③週あたりの

授業回数、④使用教材、⑤授業目標の5項目に分けて考察を行った。①教養科目としての韓国語授業の開設状況を見ると、国立大学全体の78.0%に相当する64大学で韓国語教育が実施されていた。韓国語授業の開講状況に関しては、文部省の「大学における教育内容等の改革状況について」という発表資料で公開されている2001～2016年のデータを用いて、公立・私立大学との比較や他の初修外国語との比較を行ったが、国立大学における初修外国語としての韓国語授業は、過去より拡大しているものの、私立大学や他の初修外国語に比べると未だ十分な状況とは言い難い。②科目名については、先行研究として国際文化フォーラム(2005)のデータを参照できる。それによると、韓国語授業が開設されている大学全体において、1995年に最も優勢なのは「朝鮮語」だが、2003年には「韓国語」に逆転される。国立大学の場合、1995年には「韓国語」が使われず、「朝鮮語」が8割を占めていたが、2003年には「韓国語」が増えたものの、「朝鮮語」が過半数を占める優位が続き、大学全体の傾向とはそぐわない。しかし、今回の調査によれば、国立大学においても最も多く使われている科目名は「韓国語」で、ついに逆転する結果となった。③週あたりの授業回数の場合、(1994)や国際文化フォーラム(2005)で調査が行われていた。韓国語授業が開設されている大学全体において、1993年には週1回授業の割合が最も多いものの、週2回との差はそれほど大きくなかったが、2003年には週1回の授業が74.5%で主流となり、国立大学は週1回の授業が84.5%に達する。今回の調査でも国立大学の韓国語授業は週1回の授業が多く、一部の学校では、2018～2020年の間で、週2回の授業が週1回へ変更された場合もあり、国立大学における韓国語学習時間の縮小傾向が進んでいるように思われる。④使用教材は、同種類の授業で統一教材が使われる場合もあれば、一つの学校で複数の教材が使われる場合もあり、総64種の入門用教材の使用が確認できた。そのうち、韓国で出版された教材は4種で、教材の著者が担当教員となる場合は21種あった。⑤授業目標に関しては、言語機能や場面・タスク、検定試験、学習内容、学習活動、異文化理解に関わる記述に分類し、CEFRや韓国の国立国語院で発表した「国際通用韓国語教育標準模型」、韓国語能力試験(TOPIK)、そしてハングル能力検定試験の評価基準との比較を行った。

(3) 大学授業で使用できる韓国語教材を開発するための基礎研究として、日本の大学でよく使われている入門用韓国語教科書を分析・検討した。国立大学64校のシラバスを調査した李安九(2020)そして学部生1万人以上の大学50校のシラバスを調査した加(2019)のデータを合わせて、上位15種の入門用韓国語教材を対象として、コミュニケーション活動に必要な韓国語の語彙や文法事項について考察を行った。

李安九(2022)「日本の大学における入門用韓国語教材の開発-文法項目に対する教材分析(原題:韓国語)」の学会発表では、「国際通用韓国語教育標準模型」を基準として、15種の韓国語入門教材でどのような助詞や活用語尾、表現が使われているかを調査し、その導入順序について分析した。そして韓国語能力試験(TOPIK)やハングル能力検定試験の文法項目、また韓国やアメリカなどで作られた入門用教材との比較を行った。

李安九(2023)「日本の大学で使われる入門用韓国語教科書の語彙について(原題:韓国語)」の学会発表は、15種の韓国語入門教材で使われている語彙を対象として、「国際通用韓国語教育標準模型」や韓国語能力試験(TOPIK)、ハングル能力検定試験の語彙リスト、そして韓国やアメリカなどで作られた入門用教材と比較・考察したものである。語彙の場合、コミュニケーション活動などの教材内容にもよるが、学習者の母語や文化・社会的特徴、そして学習環境が反映されることが少なくない。今回の調査では、「日本」「大学」という文脈に係る語彙が、「国際通用韓国語教育標準模型」や韓国語能力試験(TOPIK)では中級以上のものに分類されるものの、日本の入門用教材ではよく使われる場合も観察できた。

日本の韓国語教材は、取り扱われる文法項目や語彙の量が多く、限られた学習時間内に効率よく学習できるメリットがあるが、コミュニケーション活動に係る内容は不足している傾向が見られる。教養課程の初年次韓国語授業で、どのようなコミュニケーション活動を行い、どのような文法事項や語彙をどれほど学習すべきかについては、教材によってかなり差が出ていて、バランスよく教材を構成するためには、さらなる模索が必要となる。語彙や文法項目の学習のみならず、言語によるコミュニケーションや文化の学習を通して他者や世界へつながる社会的活動を実現させる統合型韓国語学習カリキュラムや教材の開発のに向けて、今後も考察をつづけたい。

<引用文献>

- ① 加、*Korean Language Education in Korea*、5巻、1994、271-284
- ② 国際文化フォーラム、日本の学校における韓国朝鮮語教育:大学等と高等学校の現状と課題、2005
- ③ 加、*韓国文化教育研究(台湾国際政治大学)*、4巻、2019、7-25

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 李安九	4. 巻 5
2. 論文標題 日本の国立大学における初修外国語としての韓国語教育の現状 - ウェブ公開のシラバスからの考察 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育紀要	6. 最初と最後の頁 220-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 南潤珍	4. 巻 0
2. 論文標題 韓国語の社会文化的特性に基づいた コミュニケーション機能別の言語項目表の試み - 日本語話者のための大学教材開発の予備的考察 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究 - 研究成果報告書 (2018 - 2020)	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 南潤珍	4. 巻 0
2. 論文標題 韓国語母語話者と韓国語学習者の作文から見たハングル正書法の現状と課題（原題：韓国語）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国語教育の現状と課題：韓国語正書法教育を中心に（2019国際シンポジウム論文集 招待論文）	6. 最初と最後の頁 99-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李安九・南潤珍	4. 巻 4
2. 論文標題 社会的関係形成を目指す韓国語教材開発に関する予備的考察（原題：韓国語）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 韓国文化教育研究(台湾国立政治大学 韓国文化教育センター)	6. 最初と最後の頁 121-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南潤珍・Yi YeongIl	4. 巻 14
2. 論文標題 語彙情報に基づいた日本語話者のための韓国語教育用語彙目録の開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮語教育(朝鮮語教育学会)	6. 最初と最後の頁 pp25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nam Yun-Jin	4. 巻 65
2. 論文標題 A review on spelling errors by learners of Korean	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 STUDIES IN HUMANITIES	6. 最初と最後の頁 27 ~ 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33252/sih.2020.6.65.27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 李安九
2. 発表標題 日本の大学における入門用韓国語教材の開発-文法項目に対する教材分析(原題:韓国語)
3. 学会等名 第29回中韓文化関係国際学術会議(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李安九
2. 発表標題 日本の大学で使われる入門用韓国語教科書の語彙について(原題:韓国語)
3. 学会等名 朝鮮語教育学会 第93回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 韓国語の社会文化的特性を反映した教材における言語項目の選定について
3. 学会等名 朝鮮語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 圏域別の韓国語評価基準の現状と共有方案(日本) (Regional Korean language evaluation criteria & ways to share them(Japan))
3. 学会等名 2020世界韓国語大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李淑炫、吳ヨンミン、小島大輝、須賀井義教、丁仁京、南潤珍、朴鍾厚、長谷川由起子、松崎真日、山下誠
2. 発表標題 韓国語教育実情調査報告-中間報告
3. 学会等名 第84回 朝鮮語教育学会例会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 学習者変因を反映した日本の大学における韓国語教育課程の開発 学習者の社会・文化的特性および母語の言語資源を中心に
3. 学会等名 国際韓国語教育学会国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 韓国語母語話者と韓国語学習者の作文から見たハングル正書法の現状と課題
3. 学会等名 2019国際シンポジウム『韓国語教育の現状と課題：韓国語正書法教育を中心に』（文部科学省・科学研究費助成事業・基盤研究（C）・駐日韓国大使館韓国文化院）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李安九・南潤珍
2. 発表標題 社会的関係形成を目指す韓国語カリキュラムの設計及び開発
3. 学会等名 韓國文化教育中心第六回及中華民國韓國研究學會第二十六回國際學術會議（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	南 潤珍 (NAM YUNJIN) (30316830)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------